
ピカチュウ達の舞台裏

ホープ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピカチュウ達の舞台裏

【Nコード】

N7725T

【作者名】

ホープ

【あらすじ】

ピカチュウ達の世界にも様々なドラマがある。もちろん、本編では語れないドラマもたくさん眠っている。ピカチュウ達にも面白い個性がある。もちろん本編に登場しない個性だってたくさん。皆さんはそんなものに興味はありませんか？

キャラ紹介 part 1 一年生の皆さん

ピカチュウ「とうとう作りやがった」

ムウマ「この司会は私よ」 捜査部やってて報われたわ。取りあえず1年生から紹介していくわね」

1年生

ピカチュウ

一人称：俺

性別：男

クラス：一組

部活：囲碁・将棋部所属

得意科目：特になし

バトルの腕：平均レベル

備考

どこにでもいる様な普通のピカチュウ。身長体重ともに平均のままであり、通知表もオールBオール3を取っている。

彼の特徴は大食いであるということ。お店のものを全て食いつくすその様はカビゴンを凌駕するという。唯一で最大の特徴である。一言コメント

「唯一の特徴ってなんなんだよー！」

ブイゼル

一人称：僕

性別：男

クラス：一組

部活：吹奏楽部所属

得意科目：音楽

バトルの腕：平均より少し下
備考

吹奏楽部でクラリネットを吹いている。体は小柄な方であり、平均より少し下。家庭菜園が好きで、家の屋上でクラブの実等を育てている。

勉強熱心なので、成績は優秀。特に音楽と国語が良い。そんな彼の弱点が、可愛いと言われることと体育である。もともと運動は苦手なのでバトルも苦手。

一言コメント

「可愛いなんて言わないで！」

ムウマ

一人称：私

性別：女

クラス：一組

部活：捜査部所属

得意科目：体育

バトルの腕：かなり強い

備考

捜査部でストーカーもとい調査をしている。体は平均と同じくらいかそれより少し小さいくらいで、頭の回転は悪い。

バトルに関する腕は確かなもので、いろんな技を同時に発動したり、未来予知やサイコネシスの応用技も得意である。どこで身につけてきたのか知りたいところだ。また、一人称についてはちょっとした過去があり、そこに触れるのはタブーとなっている。

一言コメント

「捜査よ！ ストーカーじゃなくてそ・う・さ！」

チルタリス

一人称：僕

性別：男

クラス：一組

部活：料理部所属

得意科目：家庭科

バトルの腕：ダブルは強い。

備考

もふもふした羽が気持ちが良い。料理自体はそこまで上手ではないが、ピカチュウに負けず劣らずの食いつぶりである。もふもふ。

バトルは補助技中心で、味方を助けながら戦うダブルバトルが得意なようだ。もふもふ。

空気が進んでいるのが最近のお悩み。それをキャラとして生かすにもガブリアスがいる為出来ず、非常に微妙な立ち位置になっている。もふもふ。

一言コメント

「取りあえず羽から離れてください」

ブースター

一人称：僕

性別：男

クラス：一組

部活：吹奏楽部所属

得意科目：音楽

バトルの腕：トリプルバトルが得意で強い。

備考

ふわわんとした感じでトランペットを吹いている子。作者も時々性別を間違える。楽器を吹くのは下手な三年生よりも上手い。楽器歴は七年。

バトルは、リーフィア、サンダースと組むと異常に強くなる。それ以外はからつきし。なお、これには他の二人が強すぎるだけという説も……。

一言コメント

「性別間違えないでね」

サンダース

一人称：俺

性別：男

クラス：一組

部活：陸上部所属

得意科目：体育

バトルの腕：強い方。ムウマより少し下レベル。

備考

一番キャラ付けが甘いキャラクター。存在がそのうち薄くなるかも。陸上部の方ではかなりの技術を発揮し、早速大会のメンバーに選ばれそうである。専門は短距離ではなく長距離。さらに、足が速いだけでボールなどのコントロールは悪く、はっきり言えばブイゼルよりも悪い。

バトルに関しては身代りを主体とした戦い方をする。トリッキーな戦法で攻めるのが得意。これはエルレイドから伝授してもらった戦法である。

一言コメント

「運動系キャラで燃えてくぜっ！」

ラティアス

一人称：私

性別：女

クラス：一組

部活：文芸部所属

得意科目：国語・美術・体育・家庭科

バトル：最強。ムウマでも勝てないレベル。

備考

何でもできる学級委員。そして見た目が可愛い。行事などは積極的に取り組み、何でも一位を目指そうとする。バトルの技術も凄くサポートからアタッカーまでそつなくこなせる。

同じ文芸部のグレイシアに尊敬の念を持っており、いつかグレイシアのようになりたいと願っている。なお、尊敬している部分に腹黒さは含まれていない。しかし、しっかりとその部分も受け継いでいるようだ。

一言コメント

「音楽が苦手なんですよねえ」

ミュウ

一人称：わたくし私

性別：男

クラス：一組

部活：科学部所属

得意科目：全ての教科

バトルの腕：いい方

備考

ラティアスから可愛さをのぞいて、その他の能力を引き上げたかのようなポケモン。全ての科目が得意と言っているが、体育が落ちそうで危ないらしい。

バトルは、ミュウという種族を生かした戦い方をする。いかにも知的。

科学部では何故か部長を務めており、よく色々な薬品・機械を作っている。これが発端で騒動が起ることもしばしば。

一言コメント

「一人称は私わたくしですよ？ 私わたしではありません」

マイナン

一人称：あたし

性別：女

クラス：二組

部活：吹奏楽部所属

得意科目：特になし

バトルの腕：ダブルバトルは優秀

備考

吹奏楽部に馴染んでいる、練習を邪魔する子。まだ本編未出場。主にブイゼルに話しかけてくるが、ブイゼルに気はなく、それどころか彼氏持ちのリア充である。ちなみに、彼氏のプラスルはバスケットボール部で一年のエースをやっている。

吹奏楽部ではサックスを担当。詳しく言えばアルトサックスである。テナーサックスより少し小さい。音は高めの音が出る。ジャズなどにも引つ張りだこな楽器。しかし、彼女自身に集客力は皆無だ。一言コメント

「サックス楽しいー！」

プラスル

一人称：オレ

性別：男

クラス：二組

部活：バスケットボール部所属

得意科目：ポケ学

バトルの腕：シングルでもダブルでも強い

備考

彼女持ちのリア充なポケモン。勉強、部活、友人関係のどれにも気を抜かず、一生懸命取り組んでいる為周りからの評価は高い。

しかし、完璧という訳でもなく、彼女を選ぶ目が無いのと、異常な方向音痴が欠点である。

ちなみに、まだ本編にも舞台裏にも登場していないのにキャラ紹介が書かれた、珍しすぎるケース。

シャワーズ

一人称：うち

性別：女

クラス：三組

部活：料理部所属

得意科目：技術・家庭科

バトルの腕：平均以下

備考

一人称が固有でうち。料理は得意な方で、ラティオスと仲が良い。姉のグレイシアにはいじられてばかりである。特に小学校時代の黒歴史を持ちだされると溶けだしてしまう。

インドアなのでバトルは苦手。というか体育はまれに授業を受ける程度。ほとんどサボってる。

おそらくこの学校で一番パソコンに詳しい。これだけはミュウスらも追いつけない。

一言コメント

「なんかマイナス面ばかり」

ジグザグマ

一人称：オイラ

性別：男

クラス：三組

部活：陸上部所属

得意科目：社会

バトルの腕：まあまあ

備考

くっすとはよく語尾につける。体育会キャラであるが、何故か社会が好き。リーフィアに淡い恋心を持つてる的な描写があったが、彼は惚れやすく冷めやすいので気にすることはない。陸上部では先輩

などに、真っすぐ走れと言われてる。いつかはマッスグマに進化したいと願う今日この頃。でも、走り幅跳びの才能に気が付きやっぱり進化したくないと言っている、よく分からないポケモン。

一言コメント

「惚れっぽくないっすよ。冷めやすくもないっす！」

ガブリアス

一人称：俺

性別：男

クラス：三組

部活：囲碁・将棋部所属

得意科目：数学

バトルの腕：何故か弱い

備考

アルバイトしてたりと中学生っぽくない描写があつたが、れっきとした中学生。ピカチュウに負けず劣らずの影の薄さである。結構プッシュしてるのに感想ではスルーされることもしばしば。

バトルの腕はガブリアスだというのに素早くないので結構弱い。

しかし、ただこれは手加減している可能性があるかとムウマが調べあげた。

一言コメント

「皆さん感想お願いします！」

ムウマ「こんな感じね」

ピカチュウ「一言コメントにまともなのが無い気がする」

ブイゼル「ラティアスさんはまともだったんじゃない？」

チルタリス「もふもふしてたのは誰だったんだろ？」

リーフィア「もふもふ……」

ムウマ「次は二年生よ！」

キャラ紹介 part 1 一年生の皆さん（後書き）

更新履歴

11月16日：マイナン、プラスルの項目を追加。全体に一人称の項目を追加。

12月15日：数字を漢数字に変更。ブイゼル、ムウマ、ラティース、マイナンの項目を加筆。

キャラ紹介 part 2 2年生の皆さん

ムウマ「それじゃあ2年生のキャラ紹介を始めるわ。計7人よ。結構少ないわね」

2年生

ヤミラミ

性別：男

クラス：2組

部活：捜査部所属

得意科目：家庭科

バトルの腕：そこそこ

備考

捜査部所属のヤミラミ。弱点のない私生活を送る。捜査部の中ではアルというあだ名で親しまれてる。なお、顔に似つかず家庭科が得意で、そのほかにも文学系の方は成績が良い。バトルはあまりしないため、そこまで強くない。

一言コメント

「顔に似つかずとか書かれてるし……。ムーちゃんどこまで調べてるんだよ」

ミカルゲ

性別：男

クラス：3組

部活：捜査部所属

得意科目：技術

バトルの腕：まあまあ

備考

捜査部所属のミカルゲ。ヤミラミと同じような私生活を送る。捜

査部の中ではフェクトというあだ名で親しまれている。技術が得意で、その他にも理数系は成績が良い。バトルの腕はヤミラミと同程度。ヤミラミと対になったような成績をしており、2人揃えば本当に弱点が無くなるかもしれない。

一言コメント

「ムウマちゃんは侮れないなあ」

フライゴン

性別：男

クラス：1組

部活：ハンドピンポン部所属

得意科目：理科

バトルの腕：

備考

作者の好きなポケモンナンバーワンのフライゴン。なお、所属しているハンドピンポン部は、ほとんど思いつきで生まれたものである。おっとりとした性格で、先輩にだらうがタメで喋ることもある。無意識にやっているので、悪いのか悪くないのか……。セレビィ先生の授業が好きなポケモンの1人。

一言コメント

「応援よろしくお願いします」

リーフィア

性別：女

クラス：2組

部活：吹奏楽部所属

得意科目：音楽

バトルの腕：シングルだと弱い

備考

通称自重を知らない暴走キャベツ。背景をぶち破ったり、メタ発

言を連発するなど、リミッターを外しっぱなしである。先輩と呼ばれることに異常な執着心があるが、その分実力が伴っているので部内での評判はいい。必ず先輩への気配りは忘れない。勉強もかなりできる。その分私生活が崩壊しているようだ。家ではからりだらないのだとか。彼女の机は目も当てられないような惨事になっていることはブースター以外には秘密である。

一言コメント

「誰がキャベツよ！ 後半はいいけど、前半の文章が気に入らないわ！」

ストライク

性別：男

クラス：3組

部活：囲碁・将棋部所属

得意科目：数学

バトルの腕：お察してください、と言わなくてはならないレベル
備考

動くことが大嫌いな、見かけによらないストライク。まだ本編には登場していない。現在は、体育祭のバトル部門メンバーに選ばれていることしか分かっていない。

囲碁・将棋部所属で、計算が大好き。考えることも好きな一方、答えの出ないものは嫌いである。バトルは苦手であるのに、何故かメンバーに選ばれている。これも何かの作戦なのだろうか？

一言コメント

まだ本編未出場の為、一言コメントはありません。

ザンゲース

性別：男

クラス：2組

部活：囲碁・将棋部

得意科目：理科

バトルの腕：ピカチュウくらい

備考

リーフィアにこんな奴扱いされた方。非常に不遇である。性格はクールで、内気。言いたいことがはつきり言えないシャイな性格。周りからは暗そうというイメージがあるが、実際は結構明るい。その様子は、部活中にやってくれば分かるだろう。

一言コメント

「ちなみに、もとは剣道部に入る予定だったんだ」

バクフーン

性別：男

クラス

部活：ハンドピンポン部

得意科目：体育

バトルの腕：未知数です

備考

こちら裏でしか登場していないポケモンである。例によって一言コメントもない。体育馬鹿で、勉強はからっきしだが、スポーツは凄いいという典型的なキャラをしている。テンプレ過ぎたので、改良を加えようとしたが、良い案が思いつかず、このままということになった。という裏設定を持つキャラである。

一言コメント

例のごとくありません。

キャラ紹介 part 3 3年生の皆さん

ムウマ「久しぶりのキャラ紹介ね」

ピカチュウ「人気投票に備えてじゃないの？」

ムウマ「そう言うこともね、それじゃあ3年生の皆さんの紹介ね。今回は10人よ」

ラティオス

性別：男

クラス：1組

部活：調理（料理部）所属

得意科目：国語

バトルの腕：よく分からない

備考

何故か、料理部と呼ばれることを異常に嫌っている。それほど部活に思い入れがあるということにしておこう。

そのくせ、得意科目は国語という。家庭科はあまり好きではない。バトルの腕は、妹のラティアスよりは弱いとされている。しかし、比較基準が基準なので、よく分からない強さのポケモン。今後の活躍に期待である。

一言コメント

「調理部の部長だからな。料理部の部長はやらないぞ」

カビゴン

性別：男

クラス：1組

部活：吹奏楽部所属

得意科目：家庭科（食べる的な意味で）

バトルの腕：微妙

備考

吹奏楽部の幽霊部長と言われているカビゴン。部活には滅多に顔を出さない。しかし上手い。担当楽器はチューバである。部長になる前は毎日来ていたのだが、部長になって以来部活に来なくなった。現在はランクルスが部長みたいなもの。

一言コメント

「一人称はオイラになってる」

ケツキング

性別：男

クラス：1組

部活：囲碁・将棋部所属

得意科目：無い

バトルの腕：弱い

備考

囲碁・将棋部がこのような部活になってしまった元凶。もう一つ原因はあるが、そちらには触れないでおく。暇を持て余すポケモン。自分の思いつきで部活のメンバーを招集したりする。コンクールの演奏を聴きに行ったりしたが、特別音楽に興味があるわけでもなく、ただの思いつきで行った感じである。彼が囲碁・将棋部を引退すれば、囲碁・将棋部もまともな部活になるだろう。

一言コメント

「勉強したら負けだと思ってる」

グレイシア

性別：女

クラス：2組

部活：文芸部所属

得意科目：美術

バトルの腕：話術が巧みです

備考

この学校一の毒舌であり、文芸部の部長を担っている。基本フリーダムな部活を目指しており、厳格な部活を求めるフーディンとはしばしば対立がある。ラティ兄妹とは幼いころから仲が良く、今でもその一端を見ることが出来る。しかし、妹のシャワーズをいじるのが大好きで、彼女の黒歴史を持ち出して遊んでたりする。イマイチキャラの個性を引き出せてないと感じるポケモンの1人。

一言コメント

「最近、部活内で派閥が出来てたり……」

ランクルス

性別：女

クラス：2組

部活：吹奏楽部所属

得意科目：ポケ学

バトルの腕：そこそこ。しかし、知的なバトルを仕掛けてくる備考

吹奏楽部の実質部長の位置にいるポケモン。実際は副部長である。担当楽器はパーカッション。打楽器全般を一人でこなす。サイコキネシスを使って色々な楽器を一人で演奏するが、来年の事は考えていない。ポケ学が好きなのはあり、自分の特徴を生かしたバトルをする。そのため、勝てる相手と負ける相手が毎回同じ。イマイチキャラを引き出せないポケモンその2。

一言コメント

「カビゴンには本当に来てほしいと思ってる」

ゲンガー

性別：男

クラス：2組

部活：捜査部所属

得意科目：技術

バトルの腕：ヤミラミ達より上、ムウマより下なレベル
備考

捜査部の部長であるゲンガー、あだ名はゲンちゃんである。ムウマもビックリなほどストーカーが上手く、相手の影に隠れずと尾行している。しかし、ムウマみたいなストーカー癖はないため、依頼があつた時しかこの能力は使わない。ミカルゲには劣るが、ある程度のハッキングならできる。後、勝負事になると性格が正反対になるが、今の所1回しか発動していない。体育祭に期待である。一言コメント

「特にないかなあ」

オクタン

性別：女

クラス：3組

部活：ハンドピンポン部所属

得意科目：数学

バトルの腕：未知数
備考

なぜだか口調がおかしいポケモン。特にお嬢様というわけでもない。ハンドピンポン部の部長をやっている。しかし、実際の所はピンポンの方だけの部長で、ハンドの方はフライゴンが実質仕切っている。バトルについてだが、本人が野蛮なことはやりたくないと言

い、バトルをしたことはあまりないらしい。でも、体育祭では何故か出場する。この戦いで強さが分かりそうだ。

一言コメント

「特にモデルはいませんわよ」

ブーバーン

性別：男

クラス：3組

部活：野球部所属

得意科目：音楽

バトルの腕：ラティアス以下、ストライク以上

備考

野球部部長、体育祭実行委員会会長をやっているポケモン。性格は優しく、子供相手にバトルするときは手を抜くし、先輩などとバトルするときは、負ける。つまり、本気で戦うことがないポケモン。実際の強さは未知数である。音楽が好きで、よく聞く音楽はクラシック。野球の練習にもその優しさが出てしまい、イマイチ鬼になりにきれない。何故か出番は多くないのにこんなに設定がある。

一言コメント

「こんなに設定あるなら、出番くれたっていいじゃないか……」

ウインディ

性別：男

クラス：3組

部活：陸上部所属

得意科目：体育

バトルの腕：強いはず、サンダースと互角に渡り合うくらい

備考

陸上部部長のウインディ。前の学校では全国大会に出場経験があ

る。専門は長距離で、短距離は他の部員に任せっぱなし。彼の実力だと、推薦で私立の高校にも入れるため勉強する必要がない。よって、授業をたまにサボっても文句を言われないポケモン。初登場のときはウインディと書いている。いまだに直していないので、見た方は部活体験の後編をご覧ください。

一言コメント

「ウインディって間違いやすい名前なのかな……」

フリーデン

性別：男

クラス：3組

部活：元囲碁・将棋部、現文芸部所属

得意科目：数学と国語

バトルの腕：無い

備考

ルシファアが取り憑いているのではないかと言われるぐらい傲慢な性格をしている。(ルシファアとは、七つの大罪で傲慢を司る悪魔) その他、特徴は無いのだが、強いてあげるとすれば、グレイシアと仲が良くない事、バトルセンスが皆無なことくらいである。

一言コメント

「ルシファアですか……。今度診てもらいます」

ムウマ「これで終了よ。ブーバーンの項が異常に長かったわね」

ピカチュウ「これから七つの大罪をモチーフにしたキャラって出るのか？」

ブイゼル「暴食はもういるけど、強欲と怠惰^{たいだ}は出るかもしれないっ
て」

ピカチュウ「もういる……？」

ムウマ「あんたのことでしょ。それでは？」

ブイゼル「次は教師勢です！」

キャラ紹介 part 4 教師の皆さん

ムウマ「どんどんいくキャラ紹介！今回は教師勢！」

ピカチュウ「個性的すぎるんだよなあ」

ブイゼル「教師は八人です、意外に少ないですね」

ムウマ「これからまだまだ増えるわ。多分」

デンリユウ

性別：男

担任：一年一組

顧問：囲碁・将棋部

担当科目：体育

バトルの腕：エンテイと渡り合う程度

備考

適当教師であり、テスト中に寝るなどの偉業を成し遂げている。

多分、囲碁・将棋部がこうなってしまった原因の一つ。もう一つの方は前に触れたので触れない。校内飲酒したり、生徒に休みを勧めたり、教師なら絶対にやらないようなこともしっかりやってのける。体育嫌いの生徒から、絶大な支持を受けている。

一言コメント

「最近に使われないが、語尾を伸ばすという特徴もあった」

セレビィ

性別：女

担任：一年三組

顧問：科学部

担当科目：理科

バトルの腕：バトルはしません♪

備考

天然で忘れっぽい、その上容姿も可愛いという、色々と兼ね備えたポケモン。彼女の授業が好きなポケモンも多い。しかし、その天然さには常識を凌駕するものがあり、授業に支障をきたすこともしばしば。生徒の絶大な支持があるため、基本的にはクビにならない科学部の顧問をやっているが、実際の所理科室にはあまり行かないようだ。

一言コメント

「私の授業受けてみたい？」

エンテイ

性別：男

担任：一学年主任

顧問：文芸部

担当科目：国語

バトルの腕：デンリユウと張り合う程度。唯一神の名を持つ。

備考

中二病末期患者である。学年色である赤はエンテイのタイプにちなんでいるのだとか。技名は色々痛い。書いているこっちが恥ずかしくなるものである。授業では自作の教科書を使おうとするが、シェイミにいつも止められる。文芸部の顧問をしており、顧問の仕事そっちのけで、日夜痛々しい小説を書いている。また、一人称が我と俺で揺れているが、これは多重人格っぽく見せかけるためのものである。

一言コメント

「技名が痛い？ そんなわけ無かるう」

ブクリン

性別：女

担任：二年二組

顧問：吹奏楽部

担当科目：音楽

バトルの腕：からつきし

備考

音楽を溺愛する教師。彼女と音楽のカップリングは第二中ではほぼ常識である。基本的に優しい、この学校には珍しい良識派の先生だが、音楽のこととなるとかなり怖くなる。また、全ての楽器が扱えてボイスパーカッションや口笛もできるが、音楽以外のことが全然ダメ。吹奏楽部の練習においては全て鼻歌で指示をする。また、第一中からこちらに赴任し、リーフィア達とは去年からの付き合いである。

一言コメント

「ふ〜ふん♪」

ジバコイル

性別：男、とされている

担任：二年三組

顧問：パソコン部

担当科目：数学

バトルの腕：バトルをまずしない

備考

喋り方が書きにくくて読みにくいポケモン。アップグレードを使

えばちゃんと喋れるらしい。（第二十七話にて手に入れているが、手に入れてからは登場していない）担当は数学だが、数学自体面白みのない授業なので割愛される運命にある。顧問の部活もパソコン部とかなり知名度の低い部活で、とにかく目立たない。彼も第一中から赴任したポケモン。彼の他にはデンリユウとシェイミもそうである。

一言コメント

「喋り方が普通になったから、誰だか分からなくなりそうですね」

シェイミ

性別：女

担任：三年二組兼副校長

顧問：料理部

担当科目：国語

バトルの腕：基本的にバトルはしない
備考

ルギアがエンティだけだと不安なのでということで、第一中から呼び込んだ先生。この学校の数少ない良識派であり、トラブルメーカー。彼女が色々と事件を持つてくることが多々ある。授業中はかなり優しいと評判が良いが、エンティに対してはかなり優しくない。二面性を持ったキャラである。料理部の顧問はしっかりとこなす。もちろんしっかり食べる。例えば自分が作っていないくても。副校長という役柄の出番は、卒業式と入学式にしかない。いわゆるお飾り役である。

一言コメント

「基本、映画の設定にオリジナルを加えた感じでしゅ」

スイクン

性別：男

担任：三学年主任

顧問：水泳部

担当科目：美術

バトルの腕：エンティぐらい

備考

不幸キャラ。それだけで存在価値がある。例え、水泳部が目立たなかりうが、美術の授業風景が無かりうが、不幸キャラを生かし、どこにでも出ることが出来る。ちなみに、ルギアと同じ高校から赴任してきている。エンティも同様である。未だに未出演だが、二年主任のライコウとはかなり仲が良い。彼のタイプが学年色のモチーフになっていることは言わずもがな。

一言コメント

「不幸キャラやめたいです……」

ルギア

性別：男

担任：校長

顧問：無し

担当科目：ポケ学（だった）

バトルの腕：強い……らしい

備考

ポケモン第二中学校の校長である。それ以前は、とある高校（とはいってもピカチュウ達の行く”予定”の学校）でポケ学を教えていた。周りに流されやすいので、校長には向いてない。ホウオウやブラッキーと面識があり、よく学校の手助けをもらっている。ポケモン関係が豊か。人脈はかなりあるらしい。

一言コメント

「校長向いてないの？」

ムウマ「終わったわ。やっぱり長かったわね」

ピカチュウ「ちなみに、次のキャラ紹介で最後だ」

ブイゼル「次は、学校にいない皆さんです」

ムウマ「あんなキャラやこんなキャラも紹介するわ」

ブイゼル「それでは〜」

キャラ紹介 part 4 教師の皆さん（後書き）

更新履歴

11月23日：ジバコイルの項目を更新しました。

12月10日：シェイミ、エンテイ、ルギアの項目を更新。また、

本文中の数字を漢数字に変更。全体的に文章の構成を変更しました。

キャラ紹介 part 5 地域の皆さん

ムウマ「キャラ紹介もこれで最後。でも、今後更新が入る可能性が大ね」

ピカチュウ「今回は……え？ 5名しかいないの？」

ブイゼル「意外と少ないね」。それでは行きます！」

ホウオウ

性別：男

年齢：20歳

職業：ファイヤートルネード店長

備考

今人気絶頂のお店、ファイヤートルネードの若き主人。店の名前は、彼の昔のあだ名からとったもの。一人称は、ホウオウという種族の中では珍しい俺。校長ルギアの教え子である。また、彼もルギアとは仲が良く、今でもたまに会ったりする。お店の料理は今までこそ高くつくが、昔は激安を売りにしていた。ピカチュウと出会ったことにより、また激安のお店にしようか悩んでいる。

一言コメント

「ブラッキーとも仲が良いぞ。お金をうんたらかんたらしてもらったり」

ブラッキー

性別：男

年齢：13歳

職業：大富豪の息子兼大学院1年生
備考

恐ろしく頭が良く、大富豪の息子である。大学院1年生なのは、飛び級でどんどん上に進んでいった為である。そのため、ずっと一緒にいる友達というのがない。ホウオウとは仲が良く、高校3年生で一緒のクラスであった。ルギア校長とも仲が良い。金銭的な面でもよく学校に工面している。趣味は楽器演奏であり、得意なのはユーフォニウム。なお、音楽好きなのは、父親も音楽が好きだからである。ちなみに、ブースターとリーフィアも同理由で音楽が好きになった。

一言コメント

「喋り方で年季を出してるが、上手くいかん……」

エルレイド

性別：男

年齢：58歳

職業：ブラッキー邸の執事
備考

かれこれ30年以上ブラッキー邸に務めている。影分身と身代わりを応用させ、一人でこの膨大な敷地の掃除などを行う。ちなみにサンダーズはこれをまねて今のバトルスタイルを見出した。ブラッキーのことは息子のように思っており、二人きりの時は主従関係なく話したりしている。なお、まだ登場していないが、サーナイトとは日替わりで仕事をする。

一言コメント

「これと言っておりません」

イーブイ

性別：男

年齢：12歳

職業：小学6年生

備考

悪戯好きないたって普通の小学生。かと思いきや、妄想をしたりする純粋な子供を“演じている”。多分、3姉弟の中で一番ずるがしこい。実際はグレイシアと同じくらい腹黒く、シャワーズと同じくらいネットが好き。しかし、そのような姿を全く見せないため、このことにはグレイシアとシャワーズ以外気付いていない。将来有望（？）な小学生である。来年度中学校へ入学する。

「なんか上じゃ触れられてないけど、一人称は固有のボクだよ」

カビゴン

性別：男

年齢：34歳

職業：大食いチャンピオン

備考

ピカチュウよりも大食い。ただそれだけ。たまに話にでてくるぐらいで、本編に登場する予定は一切ない。現在海外へ行っており、帰ってくる予定もない。ちなみに、吹部の部長であるカビゴンとは一切関係はありません。

ムウマ「これで終了ね。カビゴンの説明が雑な気もする」

ピカチュウ「実際これしかないんだし、しょうがないと言えばしょうがない」

ブイゼル「あ、ここで1つお知らせがあります！」

ムウマ「キャラ紹介が終わっちゃってなんかつまらないから、次回からは学校を紹介していくわ」

ピカチュウ「俺らのいる教室から、職員室、話にすら出てきてないコンピュータールームなどの紹介をする」

ブイゼル「先に言っておきますが、これらの更新予定は未定です」

ムウマ「それでは」

学校紹介 part 1 七棟一階（前書き）

色々と模索しながらの第一回目。批評、意見お待ちしております。

学校紹介 part 1 七棟一階

ピカチュウ「前々からやると言っていた校内紹介をしようと思う。
ムウマもブイゼルも今日は来てないぞ」

まずはここ、昇降口だ。誰も靴をはくようなポケモンはいないので、足拭き場として利用されているぐらいだ。まあ、夏休み前に大掃除があつたから今は綺麗な方。体育祭明けから使い方が荒くなつて結構汚れてた。それまでは綺麗だったんだけど。

ちなみに、ここは一年・二年の昇降口だ。三年生、職員は四棟の方から入るぞ。

ここが登場した回と言えば、第十六部の『迫りくるテスト、目の体育の授業……』の回だ。デンリユウがここに他のポケモンを集めてるぞ。

で、ここから校舎に入ると、早速廊下が奥、左、右で分かれている。気分的に右から行こうかな。

あつたあつた、ここが第一理科室。授業で使う、セレビィ先生が入れる方の教室だ。主に体に害のない物が保管されてるぞ。危険物はその都度第二理科室から取り出してる。

ここの教室が登場する回は九月頃に発表されるらしい。夏休み明けが楽しみなような、楽しみじゃないような……。

この廊下を左に曲がると、第二グラウンドへの道と、美術準備室がある。理科準備室は第二理科室にしかないんだ。

という訳で先に進んで美術準備室に入る。絵画とか彫刻がたくさんしまつてある。材料はスイクン先生がどんどん使つてしまう――事故ですぐにまき散らしたりするため――から、その都度買いに行つてゐるようだ。

その為、絵具特有のにおいとかはしない。

そして、ここには入口が二つあるのだが、もう一つの方を抜けると美術室の前に出ることが出来る。さっきの廊下の分かれ道を左に進んだ場合はここに出るんだ。ちなみに、これを右に曲がつてに進んでいくと六棟に出れるぞ。まあ、行く気はないから美術室に入る。

無駄に広い美術室という感想を俺は持った。スイクン先生がいつもいる教室で、無駄に縦に長いのが特徴だ。そのせいで六棟に行く廊下がやけに長くなつてるけど、これも芸術らしい。

「あ、ピカチュウ君？　ちょっと助けてくださーい！」

この声はお馴染みのスイクン先生だ。何が起こつてるかと思えば、瞬間接着剤がばらまかれた床を思いつきり踏んでしまったようだ。放つといても大丈夫か。

「大丈夫じゃないです！」

この美術室にも前と後ろに二つの入り口がある。さっきとは別の入り口から出ると、正面にさっきの分かれ道があるんだけど、見える？

学校紹介 part 1 七棟一階（後書き）

作者の描画センスは皆無な為、こういう方法で見取り図を作ってみました。

そもそも、みてみんな登録していないから、絵は上げられないんですけどね。

第1回キャラ人気投票！ 説明編（前書き）

完全な台本形式です。字の文が皆無なのも逆に珍しいかも。

第1回キャラ人気投票！ 説明編

ピカチュウ「票くれ」

ムウマ「開幕からそれはないでしょ。入りにくいわ」

ブイゼル「あはは……。それでは、気を改めまして！」

ムウマ「キャラ人気投票の説明編を始めるわ」

ピカチュウ「題名のセンスのなさは笑っていいぞ」

ムウマ「というか、私達だけじゃやりにくいわね」

ピカチュウ「基本台本形式で描写ないもんな」

ブイゼル「誰呼ぶの？」

ムウマ「リーフィアさんとか、ミュウとかそこら辺適当に呼んじゃっていいわよ」

リーフィア「来たけど！ ブースターとかはもう少し遅れるわ」

ブイゼル「リーフィア先輩早くないですか！」

リーフィア「気にしない。それより、こんな茶番をいつまでも続けるのも飽きるし。本題入るわよ！」

ピカチュウ「はい。それでは本題です」

ムウマ「投票数はお一人様5票よ」

ブイゼル「均等に1票ずつでもいいですし、このキャラに5票というのもあります」

ピカチュウ「1、2、2、みたいな感じで分けるのもありだぞ。つまり、自由に使っていいみたいだ」

リーフィア「ただし、コラボコンクール編に出演してくださった、ボルト、ルーク、ミミ、エド、ポールなど、ゲスト出演の方への投票は無しよ」

ブースター「それ以外のキャラなら基本誰でもオーケー」カビゴン
は二人出てるので注意してね。片方はほとんど出てないけど」

ピカチュウ「ああ、3話で話だけ出てきたカビゴンな。もう一人のカビゴンは、吹部の部長だ」

ブイゼル「諸事情により、TIPS2弾で出場したアルセウスも無効です。まあ、こんな脇役に入れる方はいないとは思いますが」

リーフィア「それと会話してたエーフィは問題ないわ」

ムウマ「それじゃあ、次ね。投票期間は、8月いっぱいまで！」

ブースター「伸びたね」この前の告知のときは28日までだったけど」

ミュウ「それでは分かりにくいとのことで、8月31日24時に変

更となりました」

ピカチュウ「そう言うこと。一応9月1日にパソコンをチェックするのが、学校から帰ってきてだから……」

ブイゼル「9月1日午後7時までにメッセージが入っていればギリギリ問題無しです」

リーフィア「でも、なるべくは8月中でお願いね」

ムウマ「応募方法はメッセージをお願いします」

ピカチュウ「なるべく、ピカチュウが好きだからとか、。。は俺の嫁的な理由は無しにしてほしいらしい」

ブイゼル「でも、本当にそのポケモンが大好きで大好きで仕方ない場合は、上記の理由でも良いです」

ムウマ「まあ、これ小説だしね。やっぱりキャラの内面的要素で決めてほしいみたい」

ブースター「言うべきことはこれくらい？」

リーフィア「いや、まだよ。最後に1位になったポケモンの待遇についてがないわ」

ブイゼル「1位に輝いたポケモンは、そのキャラ視点のSSショート・ストーリーがあります」

ピカチュウ「簡単に言うと、TIPSの長いバージョンだ。本編よ

り長くて、基本8000字。公開場所は裏ポケ学」

ムウマ「簡単に言えば優勝した御褒美ね」

ブースター「これで今度こそ終了つと。これ以下は各キャラのPRです。いないキャラは、空気つてことで、ね」

ピカチュウ「主人公が1位とれない小説って無いよな？」

ムウマ「捜査部の中では1位になりたい！ヒロインポジだし」

バイゼル「多分、一番出番が多かったはず……」

チルタリス「本当に最近空気です。助けてください」

ブースター「実は標準のブースターより小柄という裏設定があります」

サンダース「キャラ紹介じゃ散々言われてたけど、一応バトル好きという設定が付いたぜ！」

ミュウ「是非、この私ミュウに清き1票をよろしくお願いします」

ラティアス「最近出番多かったし、大丈夫だよね？」

オノノクス「本編で名前しか出てないけど、候補です」

シャンデラ「上に同じく」

バンギラス「俺も同じだ」

シャワーズ「大丈夫、大丈夫、うちって一人称うちだけだし」

ガブリアス「一応空気キャラ設定だが、あんま生かされてないな」

ジグザグマ「絶対ガブリアスより空気化してるっす。忘れた方はブイズ邸の話を見てほしいっす」

リーフィア「一番存在感が強いキャラよ！」

ヤミラミ「フェクトには勝ちたい……」

ミカルゲ「アルには勝ちたい……」

ザンゲース「クールです。臆病じゃないです」

ストライク「本編にすら出てないけど、一応投票対象」

フライゴン「人気投票より体育祭早くやらないかな」

バクフーン「本編いたからな？ 絶対にいたからな？」

グレイシア「腹黒設定、上手く運用できてないわね」

ランクルス「上と同じく。というか設定性格あるの私？」

ラティオス「シスコンじゃないラティオスも珍しいだろ」

カビゴン「オイラ、チューバ上手いはず」

ウィンディ「初回登場時、ウィンディって書かれました」

ブーバーン「裏にしか出てないが、熱血設定がある」

オクタン「この口調、珍しいはずですわー」

ゲンガー「豹変設定って思いつきなの？　ねえ、思いつきなの？」

デンリユウ「人気投票について一言？　かつたるい」

セレビイ「1票お願いしますっ」

ジバコイル「喋り方は書くの二疲れルそうです。見る方も疲れれる気がシマス」

プクリン「ふーん」

シェイミ「基本設定は映画からでしゅ。つまり、ミーが一番公式に近いでしゅ」

エンテイ「我は世界を統べるものなり！　人気投票など、興味すら湧かん！」

スイクン「不幸キャラは丈夫という設定、しっかり持ってます。ついでに、ライコウも出る予定があります」

ルギア「こんな校長、欲しくない？」

ホウオウ「一応、TIPS4の語り手になる予定」

ブラッキー「金持ちという設定が前押ししすぎてるせいで、楽器の方の設定が目立たん」

エルレイド「ブラッキー邸の執事です」

カビゴン「もぐもぐ……」

エーフィ「金持ち伝説の始まりです」

ムウマ「それでは、今数えたら42キャラもいたわ。話に2人の割合で出てきてるのね」

ピカチュウ「多すぎだろ。俺のキャラがどんどん食われる」

ブイゼル「もうその話は終わり。最後にこれだけ」

ムウマ「投票数は5票。コラボキャラへの投票は無し。それ以外にもアルセウスに限って、投票は無理ね。票は割り振ってかまわない。1位になったキャラにはSSがある、これは裏にて公開する予定よ。締切は8月いっぱい。一応9月1日の午後7時までは受け付けるわ。発表日は9月3日よ。ドラ。もんの誕生日ね」

ピカチュウ「最後のそれ、危ないだろ」

ブイゼル「それでは、」

第1回キャラ人気投票！ 説明編（後書き）

ピカチュウ「なんか追記があるらしいぞ」

ムウマ「肝心なところ言い忘れていたけれど、投票方法はメッセージでお願いするわ。でも、それだとユーザーじゃない人は投票できないわよね」

ブイゼル「なので、ユーザーではない人に限り、感想欄でも投票を受け付けることにします。場所は裏ポケか学園生活。復讐者以外ならどうでもいいそうです」

ピカチュウ「付け足しはこれで終わりだ」

ムウマ「それでは」

第1回キャラ人気投票！ 結果発表

ムウマ「ただいまより、第1回キャラ人気投票の結果発表をするわ」

ブイゼル「1位は誰だろう？」

ピカチュウ「作者から言わせれば、『とてつもなく意外』だそうだ。俺1位フラグか？」

ムウマ「馬鹿なこと言っていないでさっさと始めるわよ。まずは1票入った教師！」

10位 デンリュウ 1票

デンリュウ「俺？ そう言えば最近出てないな」

ムウマ「適当っぽい所が良かったようです」

ピカチュウ「どんどん行くぞ！ 続いて1票だった生徒キャラ5名の発表だ！」

10位 リーファイア 1票

10位 ブースター 1票

10位 グレイシア 1票

10位 ムウマ 1票

10位 バクフーン 1票

ブイゼル「一番下。何かの間違い？ 手違い？ 勘違い？」

バクフーン「しっかり入ってるぞ！勘違いでも何でもねえ！」

ムウマ「私がここということは……ピカチュウは0票確定ね。ああ、可哀想」

ピカチュウ「口元がにやけてるぞ。それよりグレイシアさんの姿が見えないけど？」

ブースター「それはどうでもいいから！お姉ちゃん止めて！」

リーフィア「ちょっとリアル世界に殴り込みしてくるのー！離しなさいよブースター！」

グレイシア「私に票が入るとはね。意外だったわ。上手くキャラを運用できてないのに」

ムウマ「既に收拾がつかなくなってきたわね。それでは2票入った生徒キャラ！2票入った教師はいなかったわ」

4位 ピカチュウ 2票

4位 ブイゼル 2票

ピカチュウ「よっしゃー！リーフィア先輩抜いた！」

ブイゼル「何気なく生徒キャラでは1位みたいだね」

ムウマ「ピカチュウが私より上……。意外の意外の意外だわ」

ピカチュウ「どこまで俺を見下してんだよ」

ブイゼル「あれ？ 他の1票の方は？」

ムウマ「必死でリーフィアさんを抑えてるわ。でも、既に液晶画面にヒビが入って危ないみたい」

ピカチュウ「ちょっとラティアスさん呼んでくる」

ムウマ「それじゃあ、ピカチュウのいないうちに2位へ行くわ！

3票入ったのは教師勢の……！」

2位 セレビイ 3票

セレビイ「え？ 私？ 投票ありがとう」

ムウマ「やっぱり天然さが受けたみたいです。この手のキャラはウケが良いみたいです」

ブイゼル「さて、1位はまさかの7票もの票を集めた……」

1位 エンテイ 7票

エンテイ「ふむ、我が1位か。やはり見る目があるようだな」

ピカチュウ「あれ！ あれ止めて！」

ラティアス「分かりました！ 竜の波動！」

エンテイ「断絶壁！」
アブソルート・ブロック

ピカチュウ「エンテイじゃなくて、向こうのリーフィア先輩！」

ラティアス「向こうですね！ 竜星群30%！」

ブイゼル「ひえ〜。あれは30%じゃないでしょ……」

ムウマ「とつさに守るを発動して良かったわ。それでは、今回はこれにて終了……」

エンテイ「待て！ まだ我のショートストーリーの詳細を語ってないぞ！」

ピカチュウ「メンドーだな。まあいいや、この下からはショートストーリーのあらすじだ。興味が無ければ見なくていいぞ」

——時は5年ほど前に遡る。彼がまだ他の学校で教師をしていた時、不意に起こった1つの事件。その事件が原因で、彼は未だかつて誰も見ることもなかったあるものを発見する。それを見つけた彼は、何を考え、何を思ふのだろう。そんな彼の苦悩を描いた作品である——

エンテイ「短いわ！」

ピカチュウ「これ以上詰め込んだら8000文字じゃ収まらないんだよ」

ムウマ「近日公開予定！ 公開場所は『みんなのショートストーリー』」

ブイゼル「近日と言っても、まだまだ先になります！」

ピカチュウ「ブイゼル、余計なこと言うなよ……」

エンテイ「シーユアゲイン。ハーバーナイスツデイ！」

ピカチュウ「締めカッコ悪！」

体育祭のお知らせ

ポケモン第二中学校 第一回体育祭

・開始日時 六月十八日(土) 午前九時～午後三時(雨天時延期)

種目

0 開会式

～陸上部門～

1 準備体操

2 50m走

3 100m飛行

4 障害物競走

5 玉入れ(一学年)

6 飛びつき綱引き(二学年)

7 騎馬戦(三学年)

8 200m空中リレー(クラス対抗、全学年合同)

9 1学年代表リレー

10 2学年代表リレー

11 3学年代表リレー

昼食：お弁当はフアイヤートルネードのハウオウさんから支給されます。

12 借り物競走

13 100m走

14 3000mマラソン(全学年合同)

～バトル部門～

15 / 一学年最強決定戦

出場者

一組：ラティアス、ムウマ

二組：オノノクス、シャンデラ

三組：ガブリアス、バンギラス

16 / 二学年最強決定戦

出場者

一組：フライゴン、バクフーン

二組：リーフィア、ザングース

三組：ミカルゲ、ストライク

17 / 三学年最強決定戦

出場者

一組：カビゴン、ケッキング

二組：グレイシア、ゲンガー

三組：オクタン、ウインディ

18 / 学校最強決定戦

出場者

一学年優勝クラス

二学年優勝クラス

三学年優勝クラス

19 / 閉会式

20 / 片付け（強制参加）

・バトル部門についての注意点

バトル部門では、公式ルールを採用することとする。公式ルール

とは、1試合で使っていない技の数は4つ。守る、見切りは一回のみ。十分以内に決着がつかない場合は判定とする。

大爆発等の自爆技を使い両者戦闘不能になった場合は、その技を使った方の負けとする。

違反者がいた場合、直ちに下記の責任者に連絡をすること。

責任者

学校長 ルギア

体育教師 デンリュウ

体育祭実行委員会 委員長 ブーバーン

体育祭実行委員会 副委員長 バクフーン

現在においては、これが最新の情報とする。

捜査部新聞 6月号

—— 捜査部新聞 —— ご自由にお取りください

・第1音楽室の謎

先週の水曜日（6月8日）以降、第1音楽室が使えなくなっている。

理由として、床の防音設備が甘く、職員室まで音が聞こえるから改装工事をしているとのことだが、これは真つ赤な嘘である可能性が出てきた。

まず、上記の話が本当ならば、かなり大がかりな仕事だ。それなのに、一切の機材が持ち込まれていない。

さらに、第1音楽室に音楽教師であるプクリン先生以外、誰もこの中に入っていない。

怪しいと睨んだ我々捜査部は、徹底的に調査を開始した。するとそこには、誰もが予想できないであろう真実が隠されていたのだ……。

< 次号へ続く >

・そもそも捜査部って何？ おいしいの？

我々捜査部は認知度が低い。よって、この部活を知らない者もいるだろう。

捜査部、正式名称は捜査同好会。つまり顧問の先生がいないのだ。そして、ゴーストタイプ以外入部お断り。これのせいで存在感がないのかもしれない。

主な活動としては、落し物探しだ。ただ、お金を払えば、気になるヒトのプライベートな情報や、あの人はどんな生活をしているの

か、など、なんでも調べることだってできる。

この新聞の右に、ポストが置いてありますね。そこに探してほしい物と、自分の名前が書いてあれば、すぐさま探しに行きます。

・ポケモン第2中七不思議

1 〳ルギア校長の真の姿

2 〳セレビィ先生の裏の顔

3 〳この学校に隠された秘密の暗号

4 〳何度でも復活する扉

5 〳消える教室

6 〳調理室に潜む魔物

7 〳この七不思議の秘密

興味のある七不思議を左のアンケート用紙に書き、右のポストに入れてください。一番人気のあったものから公表していきます。

編集後記

無事第1号が出版出来ました。是非手にとってお読みください！

1年ムウマ

これが捜査部の知名度向上につながることを祈ります 2年ヤミラミ
気になること、些細なことでも是非捜査部へご連絡ください 2年

ミカルゲ

来月号が出版されるかはアンケートの枚数で決まります。是非アンケートにお答えください 3年ゲンガー

——アンケート用紙——

・この新聞、どうでした？

1 〳面白かった

2 〳まあまあ

3 うまらなかった

・気になった七不思議の番号をお書きください

以上です。アンケートにお答えいただきありがとうございます。この用紙は、右にありますポストへ投函してください。

捜査部新聞 7月号

—— 捜査部新聞 —— ご自由にお取りください

・ 第1音楽室の謎 part 2

そこには、我々の予想を悪い意味で裏切る想定外のものがあつた。何かというと、抜けた床。これでは改装ではなく修理だ。何故このような嘘をついたのだろうか。プクリン先生はこう証言している。『スイクン先生から修理費を貰ったのを隠すため』だそうだが、何故隠さなければいけないのか、隠しているのならば、何故我々には教えたのだろうか。

一つ目の仮説がスイクン先生との癒着だが、我々にこの話をする以上、ありえないと断定するほかない。

その場にいた1年生徒のピカチュウ、ブースター、ブイゼルは何かを知っているのだろうか。

来月号ではこの3人にインタビューしていく予定だ。

< 次号へ続く >

・ ポケモン第2中七不思議 その1: 消える教室

この学校の6棟。第2理科室や調理室がある所だ。そこには、午後の8時頃になるとには消える教室があるらしい。

不思議に思った捜査部はもちろんここを捜査した。中には信じられないようなものがあつたのだ。

8時頃になると、例の部屋の前にデンリユウがやってきた。そこで、中に入ると同時に壁紙を使って、扉を隠したのだ。

その後見回りに来たスイクン先生。驚いて倒れてしまった。

スイクン先生を保健室に運んだ後も張り込みを続け、デンリユウ

が出た後、その教室に入ってみた。

中にあつたものは書かないでおく。もしかしたらなんとなく勘付いている方もいるかもしれない。

編集後記

七不思議の最後、気になる方は夏休み中に捜査部へどうぞ！ 1年ムウマ

スイクン先生を保健室に連れて行ったことを忘れ、鍵閉めて出てきてしまいました。明け方にスイクン先生が発見された時の罪悪感はまだ……。 2年ヤミラミ

来月号の出版は8月31日です。夏休み中の出来事をまとめます。

2年ミカルゲ

音楽室の謎は次回で最後です！是非楽しみに！ 3年ゲンガー

捜査部新聞号外（前書き）

時期的には最初の6月号と7月号の間です。

捜査部新聞号外

—— 捜査部新聞号外 —— ご自由にお取りください

・体育祭

今回は、今月18日に行われた体育祭についての記事だ。また、捜査部新聞の今後の方向性も載っている。

ポケモン第2中学校において初めての体育祭ではあったが、無事終了することが出来た……。教師3名を除いて。負傷した教師とはスイクン先生、デンリュウ先生、シェイミ先生のことだ。

スイクン先生は度重なる不幸に見舞われ、デンリュウ先生とシェイミ先生は高エネルギーを受けたのが致命傷だったようだ。しかし、月曜日には既に学校へと来ており、さほど取り上げて騒ぐほどのものではなかったようだ。

・捜査部新聞の方向性

前回の捜査部新聞の横に置いてあったアンケートだが、かなりの数で高評価を頂き、これから月刊化することとなった。毎月末に出版され、このテーブルに置かれている。もちろん無料で配布する予定だ。

また、前回アンケートをとった七不思議だが、このような順序で公開することに決定した。是非ご覧になってほしい。

- 1 消える教室
- 2 何度でも復活する扉
- 3 この学校に隠された秘密の暗号
- 4 調理室に潜む魔物
- 5 セレビィ先生の裏の顔
- 6 ルギア校長の真の姿

7、この七不思議の秘密

来月号である7月号から、来年出版される1月号まで、連載でお届けする。

編集後記

まさかの高評価の連続でものすごく気分が舞いあがっています！
これからよろしく願います。1年ムウマ

七不思議、実際の所はこの七不思議の秘密がぶちぎりだったのですが、こちらの都合上やむを得ず変更させていただきました。2年ミカルゲ

これから末長くお願いいたします！2年ヤミラミ
皆さまとは3ヶ月程度でしか関われませんが、是非その間だけでも仲良くしてってください。3年ゲンガ！

捜査部新聞号外（後書き）

！マークの後ろが開いていないのはミスではなく仕様です。

ムウマ達はそんなこと知らないという設定なので、あえて開けませんでした。

それでは
♪

TIPS1：ピカチュウ君とブースター

ムウマ「皆さんこんにちは。こんばんは。おはようございます。今回はTIPS第1弾をお送りするわ」

ピカチュウ「TIPSってなんだよ。おいしいのか？」

ブイゼル「あれだよ、本編では語られていない裏話などのことを指してるんだよ」

ピカチュウ「そうなのか」

ムウマ「それでは『ピカチュウ君とブースター』お楽しみください！ちなみにブイゼル視点↓三人称のお話です。なお、『』で括つてるのは、大事な言葉です」

皆さん覚えてますか？ ブイズ家であつた惨劇、じゃなかった、パーティを。

その時から、僕は『ピカチュウ君』と呼び、『ブースター』と呼んでいるんだ。その背景を今回は説明するよ。

それは仮入部中のお話なんだけどね……。

「ブイゼル『君』って、楽器経験あるの？」

「ううん、ないんだ。ただ、演奏を聴いて入りたいと思ったんだよね」

「そうなんだ。『お姉ちゃん』が上手いって言ってたから、てつきり楽器経験あるのかと思っちゃったよ」

日は傾き、既にオレンジ色の空になっている。仮入部終わった後の下校中だ。まだ仮入部なので、5時解散ということになっている。

そんな中、ブイゼルとブースターは、楽器のことや部活のことを話していた。

吹奏楽に仮入部した中で、絶対にここに入るときめている男子はこの2人だけである。

「ブースター『君』は楽器経験あるんだよね」

「うん」『お姉ちゃん』や『従兄』が音楽が好きで、それに感化されて始めたんだ」

「ん？『従兄』？まだ見てないなあ」

「まあ、結構学年の差があるからね」

ブースターはこのときはぐらかしたが、ブラッキーとは同年齢である。

「でも、『リーフィア』先輩はクラリネットで、ブースター『君』はトランペットだよな？」

「だって、『お姉ちゃん』とかと同じ楽器じゃつまらない気がしたんだ」

「へえ」

その後、しばしの静寂が訪れる。2人とも無言で足を進めていた。

「あ、あのさあ」

2人が同時に声をかける。こうなると、どちらも喋りにくいものだ。

「ブイゼル『君』、先いいよ!」

「ブースター『君』こそ!」

こうなると、お互いに意地でも譲り合つ。どちらも1歩も引かなくなるのだ。

「こうなったら、同時に言おう?」

「いいよ、せーの」

「『これからは『君』って付けないで呼び合おうよ!』」

言ってから驚く2人。それもそうだ。綺麗に2人の声はハモリ、一語一句全で一緒だったのだから。

「何で、そう思ったの?」

切り出したのはブースターだ。

「だって、『リーフィア』先輩が、いつまでも君付けだと嫌な感じがするとか言ってるからというのもあるけど、早く『親友』になりたいというのもあるかな」

「僕も同じだよ。言われたのは『お姉ちゃん』じゃなくて『従兄』だけだね」

それから、2人は君をつけないようになったという訳である。

ピカチュウ「ブイゼル！俺は親友じゃないのか！」

ブイゼル「だって、幼稚園の時から一緒にいるし、君つけの方が呼びやすいんだよ。大丈夫、ピカチュウ君は親友だと思ってるよ！」

ピカチュウ「それならいいけど」

ムウマ「お楽しみいただけたでしょうか。それではまた会う日まで！」

ピカチュウ「最終回みたいな終わり方するな」

ブイゼル「ちゃんと続きますからね！」

TIPS2：この世界の歴史

ムウマ「早くもTIPS第2弾ね」

ピカチュウ「こんなのやってないで執筆しろよ」

ブイゼル「まあまあ……。ここにも出番あるし、いいんじゃない？」

ピカチュウ「それもそうか。じゃあ、第2弾『この世界の歴史』どうぞ！ って関係あるのかこれ？」

この世界は、とある1『匹』のポケモンが造ったらしい。そのポケモンの名は『アルセウス』。全てにおいて頂点に立つポケモンだ。ここまでは常識の範囲だろう。

今現在、このポケモンを目撃した者はいないと言われていた。だが、私はそれを発見した。

このポケモンが眠っていたのは、『はるか遠くにある森の奥深く、神殿のようなもの』に祀られていた。

「お前が『あいつ』の子孫か……。日記を見たのだろう？」

何のことは分かっていた。私の『ご先祖様』、名前は語られていないが、そのお方が世界を創造する時に立ち会ったらしい。

その時書き残した『手記』のようなものを頼りに私はここまでや

って来たのだ。

ここで、私の書いたこの手記を見たものは疑問を思い浮かべるだろう。どうして世界の創造の前に、出会うことが出来たのかと。

もう一つ、私の子孫なら分かることだが、その『手記』が見当たらない。とも思っただろう。

まず、前者の答えだが、この世界以前にも世界は存在していた。

何が言いたいのかわからないかもしれないが、これが真実だ。変えようもない。

まず世界を造りなおしたのは、一度だけ。私の『ご先祖様』が、どうしても！ と頼み込んだのだ。その時には、他にもポケモン、分かっているのは『ウルガモス』だけだが、いたらしい。

この話を聞いた時、出来れば、そのとき『ご先祖様』と一緒にいたポケモンの子孫に会いたいと思ったのだ。

この願いを叶えるため、海を越えたり山を登ったり、廃墟を訪ねたりもした。数々の街を訪ねるために。

そうしているうちに世界地図が埋まり、私は大金持ちとなった。

話がそれってしまったが、次はその『手記』がどこにあるかだ。

はっきり言ってしまうおう。私が燃やした。『アルセウス』に頼まれて。

「お前らの子孫の相手をしているほど我は暇ではない。悪いが、その『手記』は燃やしといてくれないか？」

神に逆らえるほど、私は強くない。その場で燃やしてしまった。

それから『アルセウス』との出会いのことは誰にも伝えていない。知っているのはこの手記を見たものだけだ。

どうか手元に残っている大金を使い、『ウルガモス』達の子孫を見つけ出してほしい。

それが出来なければ、この話を後世に伝え、金を増やすのだ。

『神』との干渉者の子孫、エーフィ

「以上がこの手記の内容だ」

「へー、で。ブラッキーは何かしたの？ お金ばっか無駄に使っているようにしか見えないけど」

リーフィアがブラッキーに質問を投げかけた。

「一応やってはいる。建物の建て替えは、私達一家の存在を知らしめるためさ。一応、アルセウスをモチーフにし、ウルガモスも一緒に描いてある。これを見れば気づくかもという願いのもとにな」

「へえー、でも誰も気付いちゃいないと。まあ頑張って！」

他人事のようにブラッキーの肩を前足で叩く。一応リーフィアも子孫には含まれているのだが。

「他人事じゃない。お前も一応子孫だぞ？ 探し回るのはお前もしなければならん」

「分かっているわよ。でもまだ子供だし」

「私も子供だ。それでもやっているのだぞ？ ……。この話はもういい。それより、あの手記のことは絶対に他言無用でな」

「大丈夫大丈夫！」

そう言ってブラッキーの館を抜け出したリーフィア。それを心配そうに見つめるブラッキーであった。

ピカチュウ「話が分かりにくい」

ムウマ「前半が手記の内容。後半がリーフィア“先輩”とブラッキーさんの会話」

バイセル「ブラッキーさんの所が大金持ちになった理由だね」

ピカチュウ「世界の歴史関係ないじゃん！」

ムウマ「それを言ったらおしまいよ」

TIPS3：セレビィ先生の悩み

ピカチュウ「今回は普通に本編と関係ある話だよな？」

ムウマ「分からないわ。というか、前回までは関係あったと思うけれど」

ブイゼル「それでは！ セレビィ先生の悩み、どうぞ」

ピカチュウ「時系列的には夏休み直前だそうだ。セレビィ先生が最近出てなかった理由が分かるらしいぞ」

セレビィ。時を渡る能力がある。しかし、今現在となっては、その能力は使えないとされている。

上の文は私の種族、セレビィの説明よ。確かに、『時渡り』はできなくなってしまったけど、こんな書き方はあんまりだと思う。

私が理科の先生になりたかった理由は、『時渡り』の方法が見つからばいいな』と思ったから。

それなら別に研究者でもよかったんじゃないか。って思う人もたくさんいるのかしら。

でも、それではダメなの。高校の時、初めて気付いたことだけけど、私は孤独になると『不安感』を覚え、何もできなくなること

ここでの孤独は、一人になることじゃなくて、誰とも関わりを持たなくなった時、という定義。

セレビィという種族は、他のポケモンと支え合っていないといけないみたい。

だから、学校で色々なポケモンと関わって行って、ついでに『時渡り』の研究が出来るこの職業に就いたの。時々変なことをしちゃうみたいだけど、毎日幸せ。

だけれども、最近悩み事がある。

時々、『不安感』を覚えるようになった。みんなと仲良くしているのに何で？ 体が重く感じ、やっぱり何もできないの。

『時渡り』の研究ももう少しでメカニズムが解明できそうで、今一番頑張らなきゃいけない時なのに、何で？

『あいつ』のせいかな……。早くいなくなるといいけど。

自分の次元を持ってるんだから、こつちの世界まで入ってこないでほしいかな……。

夏休み中、『不安感』の正体が分かった。それは、風邪。

体が重いのは熱があつたみたいで、何もできなというのは、熱で頭がやられてたから計算などが出来なくてそう思い込んだらしい。

まあ、しょうがないよね」

ピカチュウ「……本編関係ないじゃん」

ムウマ「ネタバレすると、これのおかげで夏休みの理科の宿題が無くなりました〜！ という話」

ブイゼル「じゃあ、感謝しなきゃね」

ムウマ「それよりあいつというのが気になるわね」

ピカチュウ「答えは作者のみぞ知るんだろ」

ブイゼル「それもそうかもね、それでは〜」

TIPS 4：恩師

ピカチュウ「TIPS第4弾だ。こんなことしないで体育祭の本編書けよって感じだけだな」

ムウマ「今回はかりは、完全に本編とリンクしてるわ。キャラ投票の方でも触れたけど、今回の語り手は、ファイヤートルネードの店主、ハウオウよ」

ブイゼル「それでは、『恩師』どうぞ！」

俺はハウオウ。ハウオウなのに一人称が俺ってことでよくいじられる。

大体、ハウオウって種族の一人称は私だ。まあ、一概には言えないけど。

この世界には、ハウオウって言ったってかなりの数がある。さすがにピカチュウとかと比べると劣るが、俺の知る限りでも10人くらいはいるみたいだ。全部親戚だが。

そんな俺が今回語るのは、高校時代にお世話になった『恩師』についてだ。

それは誰かって？ 皆さん知ってる顔だけだな。

「ということだ、分かったかハウオウ？」

「へ？」

「おいおい、授業くらいは真面目に受ける、この『ファイヤートルネード』が」

『ルギア』先生にも今言われたが、『ファイヤートルネード』は俺のあだ名。竜巻がごとく食い荒らす炎の鳥だからだそうだ。

その名前が今日、店の名前になるなんて思わなかった。運命の皮肉だろうが。

「はい。で、なんの話ですか？」

「ホウオウ先輩、それは無いんじゃないんですか？」

今、授業中に何で後輩がいるんだって思っただろ。こいつは後輩じゃない。飛び級で上がってきた『ブラッキー』ってポケモンだ。聞く所によると、大富豪の息子だそうで、相当頭が良いらしい。まあ、11才で、高校3年生だからな。

「今は、個体値を詳しいところまでやってる」

高校の内容、正直言って俺にはさっぱり。俺が頭を抱えてる横でスラスラと問題を解いてく『ブラッキー』は凄いと思う。同学年だけど、年の差を気にしてか敬語で喋るし、礼儀もしっかりしている。

分からないんだから寝るしかないだろ、ということ、個体値の話なんかぜんぜん聞かず、俺はすやすやと夢の国へ旅立っていった……。

「おい、起きろー。昼食食べ損なうぞ？」

俺の前にいたのは、ポケモン学を教えてくれている『ルギア』先生。授業は寝ていて聞かないけど、生徒の話を真面目に聞いてくれる良い先生だ。ただ、話を鵜呑みにしすぎて、周りに流されやすいのがもつたいないかもしれない。

「え、もうそんな時間？」

俺が起きたことを確認すると、につこりと笑うルギア先生。なんだが無性に可愛い。いや、そういう意味で言ったんじゃないぞ！

「それじゃ」

1人ではたばたしてるうちに、『ルギア』先生は職員室の方へ行ってしまった。

ここからは俺の独白だが、ルギア先生は俺の店『ファイヤートルネード』の記念すべき1人目のお客さまだった。

俺が高校を卒業して2年経った、4月。俺の店の近くに新たな中学校が出来た。

その名は『ポケモン第2中学校』。校長は、懐かしき『ルギア』先生だ。

明日の体育祭。無料で生徒にお弁当を配る予定だ。『ルギア』校

長への恩返しと、とある『奴』の成長を願って。

聞くところによると、『ブラッキー』も色々『ルギア』校長に尽くしてるみたいだ。割れた窓ガラスの修理費を出したり、ドアを修理したり。

……今度3人で集まってお茶でも飲もうかな。

ピカチュウ「ほのぼのストーリーになってたらいいなあだってさ」

バイゼル「これって、後付け？」

ムウマ「一応伏線は張ってあったらしいわ。ホウオウのお弁当を配ることとか、ブラッキー家が修理費出したとか」

ピカチュウ「地味だな。というか、ルギア校長っていい先生なんだな、周りに流されやすいだけで」

バイゼル「そうだね。それでは今回はここら辺で!」

ムウマ「それでは」

TIPS5：傲慢

ムウマ「はやくもTIPS第5弾ね」

ピカチュウ「予定してたのを一つ飛ばしたから、これは本当は6になるはずのTIPSだ」

ブイゼル「それでは『傲慢』をどうぞ！ 語り手はフーデインさんじゃないですよ！」

ピカチュウ「語り手はあのミュウだ。そして、TIPS史上初の過去編だぞ！ 更に、続きものだ！」

ムウマ「色々と凄いわね」

とあるポケモンの寝室。部屋は綺麗に整理されており、散らばったプリントの類も見当たらない。そんな風に自分の部屋を形容してみる。

そんな中、不自然に開いている机の棚があつた。風か何かで開いたのだろつと私は思い、その棚を閉めようとする。

その時、見つけてしまった。忘れたい過去の記憶を。自惚れていた4年前の自分を――。

どのくらいの時からだろつか。私は、わたくし自分が周りと違うことを意識し始めたのは。

1年生の頃はただ、周りより少し物覚えが良くて、周りより少し勉強に興味のあったポケモンだった。

2年生の頃もただ、周りより少し発言できて、周りより少し勉強の内容を生活に生かせるポケモンだった。

3年生の頃。私は気付いてしまった。気付いてはいけないことに。そう、私は周りに比べ、かなり『頭が良い』ことに。

その日は学力テストの返却があった。私のテストの点数は、全て『100点』。

「また『100点』か、本当ミュウってすごいな」

「うそうそ〜！ また『100点』なの？ 凄いね！」

私にとって、この声は既に聞きなれていた。そして、当たり前のように感じていた。

その声は私にとって優越感を感じられる何よりのものであり、この声に固執していった。

そんなつまらない理由から飛び級を断り続け、周りのポケモンよりも優れている優越感を感じていた。

そして、その声が私以外のポケモンに向けられると甚だしく感じるようになっていった。勉強のこと以外でも、全て。

もつと私をほめてほしい、私をもつと見てほしい。こんな幼稚な感情が頭を満たし、勉強になど興味はなくなり、どうすれば私を見てもらえるかだけを考えただけの日々が続いた。

そんな私の幼稚な頭が導き出した答えは、『傲慢』になること。

何故か。『傲慢』になれば、否が応でも私に反応するようになる。そんな短絡的な考えからだ。後先なんて考えもしなかった。

そんな私の末路。思い出したくもないくらい悲惨なものだ。

「……。嫌なことを思い出してしまいました。今日はもう寝るとしましょう」

そう呟き、私は自分のベットで就寝するのだった。

ピカチュウ「あ、これは続きものだからな。続きはまた今度だ」

ブイゼル「過去と現在のミュウの溝を感じてくれたら嬉しいだそうです」

ピカチュウ「今のミュウは傲慢じゃないもんな」

ムウマ「次回は、つぎのTIPSよ。それでは」

TIPS 6：私の正義

ムウマ「続きものね。今回は少し注意点があるわ」

ピカチュウ「今回の語り手は『過去のミュウ』だ。一人称が私^{わたくし}じゃなくて僕になっている」

ブイゼル「そこだけご注意ください！ それでは第6弾『私の正義』どうぞ！」

構ってほしかった。ただそれだけだった。

誉めてほしかった。ただそれだけだった。

でも、今日の前にある光景は間違いなく現実。五感すべてを通して目の前にある物を捉えているのだから。

目の前に見えるのは、『コリンク』というポケモン。

目の前から聞こえてくるのは、泣き叫ぶ声。

そして、体全体が熱くなっていき、何があったか理解した周りからは非難の声が飛んでくる。

そう、僕がねんりきでこのガラス窓を割った。『コリンク』というポケモンを使って。

理解した時、テレポートですぐにその場を離れた。

……なんでここにいるんだろう。

何もない空白の世界。全てが真っ白で、まるで夢の中のような景色。

「……。今日、がそうですね？」

目の前にいるのは、ミュウ。でも、僕より体が一回り大きくて、哀しそうな眼をしていた。

疑いもせず、僕はその問いかけに首を縦に振る。なんだかこのポケモンには正直になれる気がした。

「悪いことは言わない。その『コリンク』に謝ってきなさい。『彼女』なら許してくれるはずです」

それは無理な相談だ。『彼女』の周りにはもう近寄れない。だって、『彼女』の体には僕自身が傷つけてしまった。心にも甚大なダメージを与えてしまったし、……！

その時、肩に手が置かれる。僕の思考をすべて悟っているかのよううに、でもと語り続ける。

「でも、行かなければならないのです。行かなければ君は絶対後悔する。私がしたように……」

その言葉で分かった。このミュウは未来の僕。哀しい目をしてい

るのもそれなら納得がいく。

無言でうなずき、未来の僕の手を肩からおろさせる。決意のあかしだ。

「頑張りなさい。君は3日後に引越す。それまでがタイムリミット。絶対に『彼女』に謝ること」

3日もあれば十分だ。彼女の家まで行って謝るだけでいいのだから。

「そうだ。『あのお方』から一つだけ物を渡してもいいと言われていました。これを」

そう言ってもらったのは一枚の写真。写っているのは、今の僕よりも幼い僕と『彼女』。

二人とも満面の笑みで笑っていて、バックには歴史的に貴重とされている『神殿』が移っている。そのせいで、僕の住んでいる地方ノア地方の写真なのは一目瞭然だ。

「今、私はセンター地方にいます。ここの中学校でみんなと楽しく過ごしています。けれど、時々思い出すのです。『彼女』は今どうしているのか、みんなと仲良く出来ているのか。……これが後悔というものなんでしょうね。『彼女』への罪滅ぼしとばかりに、口調も堅苦しいものになってしまいました」

未来の僕はそう言って笑うと、自分の時間へ戻ってしまった。それと同時に真っ白な世界も終わりを告げる。

僕は自室のベッドで寝ていたようだ。時計を見ると、まだ7時。それなのに、お母さん達の声が聞こえないということは学校にいるのだろう。

さあ、僕も学校へ行こう。あのことを謝らなきゃいけないんだ。

ムウマ「肝心の過去、全然ないじゃない！」

ピカチュウ「そこは御想像にお任せするそうだ」

ブイゼル「気になるワード、あったんじゃないですか？」

ムウマ「今後も地方名は出るかもしれないわ。なるべく覚えやすくしたというけれど、どうかしらね」

ピカチュウ「今度はキャラ投票が終わってからだ。内容は未定」

ブイゼル「それでは〜」

TIPS 6：私の正義（後書き）

ノア地方というのは、北東からきています。センター地方は言わずもがな、中央の意です。

また、今回の話を読んで、思ったことがあればどうぞ！ 疑問点なども構いません。大分ばっさりカットしましたから。

それでは。また次回会いましょう。

TIPS7：センター高等学校

ピカチュウ「TIPSの話って重いのかだよな」

ムウマ「そうお？ 本編とのギャップは結構好きよ。私的には」

ブイゼル「普通にコメディなものもあるしね。それでは『センター高等学校』をどうぞ！ 語り手はシェイミ先生です！」

ミーは一応この学校の副校長をやっているでしゅ。出番が無いから目立たないでしゅけど。

「シェイミ」。それと学年主任3人はちよつと来てくれ」

ルギアがこのメンバーを集めるときは大抵何するか決まってるでしゅ。『センター高校』に行くんでしゅ！

「我を呼び起こすものは貴様か？」

「スイクン、この馬鹿どうにか止めてやれ」

「ミーからもお願いでしゅ」

スイクンが声をかけると、何故かスイクンが火炎放射をくらってたでしゅ。そして、ライコウはこっちが初登場なのでしゅね。

「うん、いつもの通りだな。それじゃあ『センター高校』に行くぞ」

ミー達5人はセンター高校出身の生徒であり、センター高校で教師をしていたのでしゅ。まあ、ひっこさない限りはセンター高校に行くことになるから当たり前なんでしゅけどね。

あつという間についたでしゅ。ルギアってやっぱりすごいんでしゅね。

目の前にの高校にはたくさんの生徒が出入りしてるようでしゅね。そう言えば今日がこっちの終業式でしゅか。

「うん、やっぱり変わってないなあ。まだこっちの方がなじみがある」

とか言いつつ、ずかずかと学校の方へ歩いていると不審者にしか見えないでしゅね。

「で、今日は何しに来たんでしゅか？」

「シェイミは聞いてないのか。ちょっと向こうから相談事があると言われてきたんだぞ」

ミーからすればライコウじゃなくルギアに答えてほしかったでしゅ。ライコウは信用できないでしゅ。

「悪いな、俺に信用が無くて」

心の中を読むのはいい加減やめてほしいでしゅ。

「ついたぞ。えーっと、今の校長はまだ代わってなかったはず」

「ということは『ギャロップ』校長でしゅね。ポケモン協会のギャロップさんの妹の」

「あれ、もう来てたのですか。それじゃあ中へお入りください」

ミー達の騒ぎ声で気付いたらしかたでしゅ。それより相談事ってなんなんでしゅか？

それを知るためにも、取りあえず席に着くミー達。

「で、相談というのは？」

「はい、これを見てください」

と言って差し出したのは、ポケモン第1、2中学の生徒数と、私立高校への進学率のデータでしゅね。

「実は、私の高校にはこれ以上の進学は無理なんです。既に教室は満員。たまたま入学率の低かった2年生がいるからその教室を1年に使わせてますが、来年度は無理そうです」

「つまり、ミー達の中学を付属中学にして高校を造ればいいんでしゅか？」

要約するとそう言うことになるって言ってくれたでしゅ。イーブイ家の跡継ぎが資金援助をしてくれているからその程度は楽勝でしゅ。

「うむむ、分かりました。今すぐにといい訳にはいかないですが、夏休み明けまでには答えを出しましょう。なるべくこちらの方にも高校を作れるように努力はしてみます」

ミー達の学校。実はとんでもない学校なのかもしれないでしゅね。

ピカチュウ「付属！？　つまり、進学しても俺の存在感は上がらないのか……」

ムウマ「そう言うことよ」

ブイゼル「でも、今の校舎でもさすがに6学年は無理な気もするなあ」

ピカチュウ「改装じゃなくて、周りの土地でも買い占めそうだな」

ムウマ「それか、上に長くなるとか？」

ブイゼル「まあ、色々案はあるね。それでは」

TIPS 8：謎のこだわり

ピカチュウ「TIPS第8弾。そろそろ本編の裏視点とか無いのか？」

ブイゼル「要望があればやるって。今回は違うみたい」

ムウマ「今回の話は『謎のこだわり』よ。語り手は察しがつくんじやないかしら」

ブイゼル「それじゃあどうぞー！」

お前は料理と調理の違いについて知っているか？

料理は一般のポケモンが行うものだ。おいしく作ればそれでいいのが料理だな。

調理は専門家が行うものだ。味付け、見た目、栄養など全てに気を使い、完成した料理はもはや料理じゃない。調理品なのだ。

だからお前は『調理品』を作れるよう努力しろ。決して料理で妥協してはいけないのだ。

上の言葉は俺の『父であり調理師であるもの』が残した言葉だ。

この言葉を信じ、今まで料理と調理を決定的に使い分けてきた。周りにも変なこだわりと言われるぐらいにな。

そう、察しがついてたかも知れんが、俺の名前はラティオス。『調理師』を目指すものだ。

「『料理部』のラティオスさん。どこか欲しい所ある？」

今は10月に行われる『学園祭』の話し合い中だ。2日目は部活で出し物が出来るからな。その時の為の場所取りって奴だ。

「調理室が近い方が良くからなあ。7棟の3階を借りていいか？」

『料理部』と呼ばれることに嫌悪感が無いわけない。まあ、来年には卒業だ。これで最後の学園祭なのだから少しくらい気を抜かないとな。

「それならば6棟は誰も使用しないということですね。科学部が頂いてもよろしいでしょうか」

「いいわよ。それじゃあこれで決定ね」

この話し合いの進行はランクルスだ。カビゴンがサボるあまり、彼女が実質の部長になっている。

それに加え、今年は吹奏楽部が部長の中のリーダーだからな。さぞかし大変なことだろう。

部長の中のリーダーとは、この学校が独自に作ったものだ。

何せ、この学校には部対抗のことが多い。その時の打ち合わせ時に指揮を執る奴が必要ということで、毎年で部長がやらされるもの

がリーダーだ。

「後は外、そして体育館ね。ここからが長くなりそう」

ランクルスの言葉通り、打ち合わせは夜遅くまで続いた。

それで、終わったのはいいが、学校側から遅すぎるので帰るなどという指示が出てしまったのだ。

「しょうがないわね……。ねえラティオス。何か作ってよ。『調理部』部長として、ね？」

唯一、違和感なく『調理部』と呼んでくれるのはグレイシアだけだ。その為、夏休みが明けてからというもの、何かと一緒にいることが多い。まあ、グレイシアも迷惑そうな顔をしないので良いみたいだが。

「じゃ、ちょっと作ってくるから待ってろよ」

ムウマ「さて、やっと1つの疑問が解けたわね」

ピカチュウ「ラティオスさんもなんとなく区別してるわけじゃないんだ……」

ブイゼル「これは、夏休み明けの9月中ごろのお話です。夏休みが明け次第結構絡んできます」

ムウマ「それでは、そう言えばテストもその頃ね」

TIPS9：コンクールに向けて

ブイゼル「これは裏視点の話なんだって」

ムウマ「語り手はブースター↓ブイゼルだわ。視点移動は珍しいわね」

ピカチュウ「それじゃあ、『コンクールに向けて』をどうぞ！」

僕は大体ブイゼルと一緒に部活に行く。土曜日とかでも待ち合わせして行くんだ。

で、夏休みに入って、朝から夕方まで部活という毎日が続いている。

今日もブイゼルと待ち合わせしていくんだけど、なんだかいつもより遅い。支度に手間取っているのかなあ。

なんて言っただって、今日は合宿だから。

コンクールの前々日、前日を使い吹奏楽部は合宿をするんだ。もちろん校内でだけど、お姉ちゃんに聞くとかなり楽しいらしいんだ。

あ、何でお姉ちゃんは合宿に行ったことがあるのかというと、これは第1中学校の時から恒例イベントで、別にこっちに来て作られたという訳ではないんだ。

「ブースター！ 遅れてごめん！」

やっと来たよ。いつもはこんなに遅刻するのは珍しいんだけど、どうしたんだろう。

「おはようブイゼル。でも、何でこんなに遅れたの？」

「あはは……。ピカチュウ君から電話があつてさ」

それでついつい長話しちゃったのかな。まあ、今からでも普通に関にあうからいいや。

ブースター↓ブイゼル

音楽室についた僕たちは、早速楽器を取り出して練習を始める。

今日は朝から晩までたっぷり練習できるけど、コンクールも間近だし一生懸命練習しなければならないからね。

それにしても、最近は吹奏楽部にも色々なポケモンがいるように思えてきた。

リーフィア先輩やランクルス先輩みたいに真面目に練習するタイプのポケモンや、カビゴン先輩みたいに本番だけ来るポケモン。カビゴン先輩は上手いからいいけど、他のポケモンはあまり上手じゃない。多分、僕やブースターの方が上手いと思う。失礼だけど。

「ねえねえ聞いてよー」

今日の前にいるポケモンも本番だけ来るようなポケモンだ。名前

はマイナンって言う。

サックスパートなんだけど、いつも僕の練習を邪魔しにくる。

「まーた抜け出してるわねマイナン！ 早く戻らないと先輩に言いつけるわよ」

その都度リーフィア先輩が追い出してくれるんだけど、いい加減にしてほしいと思う。

「毎年いるのよあんな感じの子。大体は雰囲気になじめなくてやめるんだけどね。マイナンは馴染んでるからなあ」

この後すぐに合奏が入って、リーフィア先輩には言えなかったけど、僕はこの吹奏楽部を……。

午後5時。朝から吹きっぱなしだったけど、昼食後目手の休憩が入った。と言っても、疲れてないからと昼食の時も楽器を吹いた僕が悪いんだけど。

とにかく疲れた！ リーフィア先輩は風に当たってくると言っただけ外に行ったけど、僕は外に行く気も起きないや。

「ブイゼル、お疲れ〜！」

ブースターが寄り添ってくるけど、それに答える気力すらない。今はとにかく回復が最優先だ。

「あー、完全に魂が抜けちゃってるね。この後は体育館に移動だけど大丈夫？」

「ダメかも。もう少し寝かせてよ」

ブースターはそう言い放っておいてくれた。疲れている僕にとつてはありがたい。

軽く睡眠をとること30分。大分回復してきたし、これ以上寝ると6時の練習に間に合わなくなっちゃう。

「あ、ブイゼル起きた？ それじゃあ行く？」

「うん。もう行くよ」

体育館に向かうことになるんだけど、その時、ちょっとしたトラブルがあったんだ。

「え！？ あれリーフィア先輩じゃない？」

僕が見つけたのは、校庭で倒れているリーフィア先輩。吹き過ぎで倒れちゃったのかな。

「うつつ。ムウマちゃんってやるわね。シャドーボールは効いた…」

そして、その下にはスイクン先生が。

「お姉ちゃん、なんか下にいるけど、放っておいて先行こう？」

ブースターの腹黒い一面が見れた貴重なシーンだと思う。

「そうね。先行きましようか」

今は午後9時。練習が終わって楽器を音楽室に戻し、これからフリータイムという時間だ。

で、僕も楽器を置いてきた訳なんだけど、何故かブースターとかは持つてるんだ。

「ブースター。楽器置いてこなくていいの？」

「あれ？ 朝なら楽器吹いていいって聞いてない？」

「うん。後半は記憶がかなり曖昧になってる」

なるほど、だから楽器置きに行くメンバーが少なかったわけだ。

そこにリーフィア先輩がやってくる。

「ねーねー2人ともー。ちよつと11時くらいからトランプしない？ それまでは疲れてるだろうし、ブイゼルは楽器取りに戻るんですよ？」

なんか、僕が楽器を取りに戻ることは当然みたい。まあ行く気だったからいいけど。

「その時にさー、スイクン先生に頼まれた書類も取ってきてよ。私

が頼まれたんだけど面倒だから」

空間を破れる先輩が言うセリフじゃない。断れないから仕方なく了承したけど、こういうのは自分で行って欲しいかな。

体育館から出る。中よりも風が体に当たり心地いい。とか考えてると、突然電気が消えたぞ！？

後ろでボタンと勢いのいい音が聞こえる。扉が閉まったらしいけど、そんなことを考える余裕はなかった。

はつきり言うとは僕は暗い所、もっと正確に言えば怖い所は嫌いだ。それが、電気のつかない夜の校舎にいますとかおかしいでしょ。こっちの精神も参っちゃうよ。

至る所に怖がらせようとしてる物があるし、多分、ピカチュウ君達の仕業かな。

と、理屈では分かっているけど、反射で何にでも短い悲鳴をあげちゃう。

気付いた時には僕は音楽室についてたみたいだ。何故か体がぬれていたりするけど、何があったんだろう。

クラリネットを持って（スイクン先生の書類は頭になかった）音楽室から出る。どこを通ってきたか覚えてないから、とりあえず校庭に向かっていた。

スプリングラーが作動していた。ここは通れないから廊下から行かなきゃダメなのか。

——残念、いや非常に幸運なことに、この後の記憶は全くない。記憶にあるのは、リーフィア先輩が助けに来てくれたことくらいかな。

後からブースターに聞いてみると、リーフィア先輩もグルで助けに来る事は決まっていたらしいです。そして、さらに興味深いのはその報酬でした。

今日の肝試しで撮られた僕の写真20枚だそうです。助けに来てくれた時の感動返してください。

ピカチュウ「ブイゼルは後書きにはいないぞ」

ムウマ「とはいっても語ることもないけれどね。それでは」

TIPS9：コンクールに向けて（後書き）

ネタバレしますと、ムウマとリーフィアが契約したのはあの時、ムウマがジューズを買いに出て行ったときです。

そこで、もうぶっ飛ばされることも決定しました。

ブイゼルの写真20枚は今後話に出てくるかもしれませんが。

矛盾点などあればご指摘ください。

TIPS10：業炎弾丸

ピカチュウ「記念すべきTIPS第十弾。飾るのはもちろん俺……
じゃなくて、人気ナンバーワンだった教師だ」

ムウマ「さり気なく過去形にしてるわね。まだ第二回人気投票やってないから現在形にしときなさい」

ブイゼル「というわけで、語り手はエンテイ先生で、『業炎弾丸』をどうぞ！」

ピカチュウ「時期的には去年の夏だ。前にいた高校、センター高校でのお話だな」

リーゼング・フレイム・プレート

業炎弾丸を完成させたのはつい二日前の事だ。

エンテイという種族上、普通は取得できない技らしいのだが、そこは俺の腕の見せ所だ。ちなみに、難なく取得することが出来た。

やはり、俺は特別なのだろう……。と、感慨に浸っていたその時だった。

「エンテイ！ 上上！ 花瓶が降ってきてるぞ！」

その声——旧友の『ルギア』のものだ——を聞いて上を見みると、確かに花瓶らしきものが降ってきていた。ただ、まだ高さに余裕がある。

そこで、だ。これを普通に避けたらつまらないだろ？　と言う訳で、これを破壊してみようと思う。

「よしっ！　俺の新たな力、受けてみるがいい！　リゼンゲ・フレイム・ブレット業炎弾丸！」

落ちてくる花瓶に向かって、重力に逆らって進んでいく俺。どうだ？　格好いいだろう。

何かがぶつかる衝撃、その次の瞬間にはバラバラに砕け散る花瓶……？　なんだ。どうして砕けない？

「あー、それ耐熱仕様でかなり硬い素材でできてるから……。まず壊れないぞ」

頭に走る鈍い衝撃。それは花瓶が頭部にぶつかった衝撃なのは理解したなくても理解できた。

俺は……死ぬのか？

こんな所で、俺は負けるのか？

そんなはずがない。俺なら勝てる！　きっと、誰にだって勝てるのだ！

「うおおおお！　俺の真の力、ギャラクシードラゴン『銀河龍モード』を発動する！」

俺の纏う炎は青白く変化し、温度を急激に上昇させる。更に、宙に放りだされていた足を壁に固定させる。これで俺は負けない！

体にみなぎるこの感触。懐かしい。これを感じたのは『あれ』以来だな。

そういえば、『あいつ』は元気にしているだろうか。この戦いが終わったらちよつと会いにいつてやるか。

気付けば、俺はいつから本気になっていなかっただろうか。ずっと教師という職業に慣らされ、本気を出したのは『あれ』の時だけだったかもしれない。

言ってなかったが、俺はこの戦いが終わったらこの学校にいる教師に告白するんだ。それまで、俺は死ねねえ。

「お前死亡フラグ立てすぎだ！ このままいくと死ぬぞ！」

俺の旧友その二。ライコウの声も聞こえる。何？ 死亡フラグだと？ そんなもんへし折るもんだろうが！

「大丈夫だ、問題ない」

そのセリフを言った途端、頭から花瓶の重みが消え、激痛が頭に走る。炎の勢いも止まる。だが、俺は落ちない。

何故かと思つたら、炎のせいで壁が溶けて、足にくっついてた。この学校の材質が気になる。

とか考えているうちにも視界がどんどん暗くなり……、気付いた時は保健室の部屋に寝かされていたのであった。

ピカチュウ「……」

ムウマ「……」

ブイゼル「……あ、それではまた次回！」

TIPS11：入れ替わり騒動・裏　く前編く

ピカチュウ「カオスな第十弾も終わったな。今回は第十一弾だ」

ムウマ「あれはもう何が何だか分からないわよね。TIPS当初の目的からは大分外れている気がするわ」

ブイゼル「入れ替わったときの僕視点だよ。つまりピカチュウ君の体をした僕の視点。分かりにくいかな？」

「じゃあね。僕は部屋にずっと引き籠ってるから」

自分の目から恨めしそうな視線が飛んでくる。何かいけないこと言ったかな？

「それじゃあ、ばれないように頑張つて！」

ピカチュウ君に励ましの言葉をかけ、僕は扉を閉める。ピカチュウ君の親は今はいない。つまり何しても問題ないんだー！

早速ピカチュウ君の部屋に入って、え？

何故か、ピカチュウ君の部屋にはムウマちゃんがいたんだ――。

「あ、ピカチュウ。あんた、自分から夜一緒に遊ぼうと誘っておいで、昼はブイゼルと遊んでいたの？　そう言えば今日はブイゼルのコンクールだったわね。それで来てたの？」

一気にまくしたてるね、ムウマちゃん……。

「え、あ、いや、うん」

「はつきりしなさい」

えー、はつきりしろって言われても、そんな約束知らないし。

取りあえず、隠した方が良いの……かな？ ばれると厄介そうだし、一瞬にして学校生徒全員に伝わりそうだしね。

「そう。それで来てた」

怪しそうな物を見る視線は取りあえず外してくれた。けど、まだ何か疑ってるみたいだ。

「どこかピカチュウらしくないわね。本当にピカチュウ？」

ドキリ。という効果音が聞こえるくらい僕の胸が高まる。というか、ちょっと後ずさりしてて、かなり怪しいオーラが出ている気がする。

「あつ、当たり前じゃん！ 逆にこんなに似てて別人とかありえないしー！」

あ、ムウマちゃんの目つきが変わった。これは何かを確信したかのような目だ。

「そーねえ……。入れ替わりとか、入れ替わりとか」

完全に分かってるでしょムウマちゃん。入れ替わりを二回言う時点でもう分かってると思うよ。

「絶対に、絶対に広めないでね？ ムウマ……ちゃん」

ムウマちゃんが広めないという確証は無いけど、ここまで問い詰められて言い訳なんて僕には出来ないし、早々にカミングアウトする。

あ、顔がものすごいにやけ顔だよ！ これは嫌な予感しかない
よもう！

「いい事聞いたわ。それじゃあ早速……」

と、逃げられる前に電磁波を浴びせておく。何で出せたかという
と、感情が高ぶってピカチュウ君の体が電気を帯びてみたいで、
そのまま引き留めようと触ったら電磁波になっちゃった。

「絶対に他人に言わない事。後で厄介事になるもん」

それで止まるムウマちゃんなわけもないので、そのまま逃走を図
る。しかも、攻撃してきたんですけど。

「えっ！ いや、家壊れちゃう！」

電磁波のせいで喋ったりはしないけど、それってかなり怖いから
！ さっきのシャドーボールは不発に終わってたけど、当たってた
らこの家の命が無い。

「何か気になる事聞いていいから！ この家の中荒らしてもいいから、ね？ 取りあえず抑えて抑えて……」

これっていいのかなあ。まあ、家を壊されるよりはましだと思いたい。

何とか了承してくれたようで、僕は麻痺治しを使って麻痺を治してあげる。

「ホントに徹底搜索していいのね？ ピカチュウに怒られても知らないから」

ふう、取りあえず一件落着。僕はちよつと横になろうかな……。疲れちゃった。

ピカチュウ「おいブイゼル」

ブイゼル「ふえ？ ごめんなさい！」

ピカチュウ「いや、絶対に許さねえぞ！」

ムウマ「後編に続くわ」

TIPS12：とある事件についての独白

ピカチュウ「入れ替わり裏の間に挟まれる第十二弾だ」

ブイゼル「時期的にも入れ替わり裏の前後編の間に挟まれます」

ムウマ「これは『独白』よ。誰が述べているかは分からない物。口調も変わっているかもしれないわ」

まだ、私が幼いとき。とても大きな事故、いや、事件があった。

とあるポケモンが乗った車に次々と車が突っ込み、周りにいた歩行者も併せれば百は優に超える負傷者が出た。

目も当てられない状態だったという。残念ながら私には全く覚えが無い。

これは警察からは集団自殺という見解がなされた。何故なら、車に乗って突っ込んでいったポケモン全てに共通点があったのだ。

この事件の前に大失脚した、とある大きな会社に全が勤めていたのだ。

だが、真相はもっと違う所にある。それを私は知っている。

何故なら、私はその事件の『首謀者』の娘なのだから――。

でも、私もこの『手記』を見つけるまでは全く知らなかった。集団自殺だと本気で思いこんでいた。

今考えれば、確におかしい所はたくさんある。

まず、あの事件を機に、私は『父の遺言を聞き届けたというポケモン』に、徹底的に指導された。それは、護身術であったり、戦闘技術であったり。とにかく戦う事については徹底的にたたきこまれた。

そのおかげで、今ではかなり強いと呼べるレベルに私は位置している。

また、意外なのは『一人称』を改めさせられた事だ。その頃はおてんばだった私は、あたしという一人称を使っていた。しかし、それを今の私に変えさせられたのだ。

この二つの出来事を重ねれば、透けて見えるのは私が狙われる可能性があった。それぐらいしか思いつかない。

でも、私はその事件で『狙われたポケモン』を知らないのだ。謝る事も、何もできない。

私は、探しだしたいのだ。その『狙われたポケモン』の子供を。

それをする役目が私にはある。

ブイゼル「なんでこんなに後味悪いんだろうね」

ピカチュウ「まっ、結構核心に触れる記述もあつた気がする。大分絞れてるんじゃないか？」

ムウマ「分かったら教えてくれると嬉しいわ。『狙われたポケモン』の子供も実はもう登場済みよ」

TIPS13：とある夏の入れ替わり騒動・裏　く後編く

ピカチュウ「これで入れ替わり騒動に関するネタはおしまいだ。本編だけで一カ月ぐらいやってたな」

ムウマ「どれも更新が遅いせいね」

ブイゼル「あはは……。それではTIPS第十三弾！　視点は前編と変わりません！」

ムウマちゃんが帰った後、僕は徹底搜索された家をとにかく掃除している。既に時計は明日の時刻を示していた。ピカチュウ君は明日もすることはないから問題ないね。良かった。

「ん……？」

階段の下にある備え付けの物置。これ自体は不思議ではない。階段で使えないスペースを有効活用する為に備え付けることも多いらしいからね。

でも、妙に荒らされている形跡があった。物をすべて引っ張り出したような、そんな感じ。

ちょっと気になって、いや、片づける為に足を踏み入れる。なんと、そこには地下に続く階段があったんだ。

——僕もこんな階段は知らない。結構昔から遊びに来てたのに。

なんか入ってはいけないというオーラが満載だったので降りしかなかった。

その後も、見える所を中心に片づけていく。クローゼットの中とか、かなりぐちゃぐちゃになっているけど、見て見ぬふり、見て見ぬふりと……。

そんな努力もあって、見える範囲の半分は終わった……かな？
後は明日にしてもう寝よう。

上に戻ってベットに寝っ転がる。途端に精神的な面での疲れが襲ってきて、すぐに眠ることが出来た。

「ピカチュウ！　じゃない、ブイゼル」

僕を起こしてくれたのは、……リーフィア先輩？

「何してるんですか？　ここって他人の家じゃないですか」

「次元を超えられる私に不可能はないわ！」

本当はあり得ない事だろうけど、リーフィア先輩が言うと妙な説得力を持つからなあ。

「それより、第三理科室で待ってるポケモンがいるわよ」

第三理科室、そんな教室なんてあったっけ。ダメだ、起きたばっ

かだから頭が動かない。

「大丈夫。ブイゼルは知らないはずよ。知ってるのはセレビィ先生とミュウくらいだから」

そうなんですか。でも、それってプライベートな目的で公共のお金を使っているのと変わらないんじゃないか――。

「細かい所は気にしないでいいわ。それじゃ起きて。歩いていくわよ」

「僕も次元ワープで第三理科室に行きたいんですけど」

「あれは私だけの特権よ」

こうして、本編の入れ替わり騒動に繋がるんだ。

ブイゼル「ピカチュウ君大金持ち説が提唱されるね」

ムウマ「地下室持つてるなんて常人じゃありえないもの。私もびっくりしたわ」

ピカチュウ「だー！俺も知らなかったぞ、地下室があるなんて。それより、後半のやり取りは色々とおかしいじゃん」

リーフィア「他のポケモンの心の内を読むのと、次元ワープは私だけの特権よ！」

ムウマ、「リーフィア先輩はもうチートキャラでいいんじゃないかしら」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7725t/>

ピカチュウ達の舞台裏

2012年1月1日18時48分発行